

ペスタロッチャー教育賞 受賞者紹介

特定非営利活動法人 東京シューレ 理事長

おくちけいこ
奥地圭子氏

1941年東京に生まれる。東京大空襲の後、父の郷里広島県三原市に移り、子ども時代を過ごす。1963年に横浜国立大学を卒業、東京と広島の公立小学校で教えた。1985年に22年間の教職を辞し、不登校の子どもに学習の場を保障するため、雑居ビルの一角を借りて「東京シューレ」を開設。当時はまだ不登校は登校拒否と呼ばれ、治療・矯正の対象として偏見のまなざしをもって見られていた。以後、氏はこの偏見と闘う最前線に立ち続ける。不登校の子どもが安心して過ごせる居場所を確保し、当事者同士のネットワークをつくり上げた。不登校新聞の発刊をはじめ、書籍の出版や講演活動を通して、社会のなかにある不登校への無理解を明確な言葉にすることで一つひとつ解きほぐしてきた。2007年には不登校の子どもを対象とする私立中学「東京シューレ葛飾中学校」を開校している。氏のそうした活動に救われた若者と親の数は知れない。不登校への偏見はまだまだ社会に根深いが、氏の年来の努力によりひとびとの考え方は着実に変わりつつある。

長らく小学校教員をしていた奥地氏がはじめから不登校を正しく理解できていた訳ではない。70年代末に我が子が不登校となり、子ども自身や育児にその原因があるとする当時の言説に違和感を抱くことから始まる。我が子に向けた愛が不十分であったからだと責められることには納得がいかなかったものの、しばらくは小学校教師であることと不登校児の親であることの間で苦しみ、また我が子を苦しめることにもなっていた。精神科医師の渡辺位と出会い、いじめや行き過ぎた管理に対する自己防衛反応として不登校があることを知り、不登校問題が社会の側の問題であることに気

づく。病院内につくられていた親の会に参加し、活動を積極的に展開させて、1984年に当事者のネットワーク「登校拒否を考える会」を立ち上げた。そして、不登校児もそれぞれが認められ受け入れられる居場所を求めていることを痛感した氏は、自らの教職経験を活かして、不登校児の学習の場を開設するのである。

その奥地氏の22年間の教職もまた、偏見と闘い、優れた教育実践を追求し続けた期間であった。結婚、三児の出産・育児、親の介護。その都度、「はずれ」の担任だと保護者から失望の言葉を向けられた氏は、実践において、また子ども理解において、決して引けを取らないことを示してきた。女性として、母親として体感してきたことを教師の仕事に十分に活かすことができるとの自信もあった。授業を磨くためにさまざまな研究会に出かけ、遠山啓に導かれて優れた実践を開発し、教育雑誌『ひと』において紹介された。終の棲家と決心して移住しながら家庭の事情で東京に戻ることもとなった広島滞在は11ヶ月に限られたが、江波小学校におけるその期間の実践記録は、こども新聞活動や創作平和劇指導とともに一冊のモノグラフに収められ出版されている。学年初めに失望の言葉を向けた保護者らも年度半ばには氏の教育実践をよく理解する支援者となってくれた。

ペスタロッチャーは戦争や経済構造から生み出された貧児を預かり、彼らが安心して学べる場所を提供した。社会から排除された貧児であっても教育が保障されることによって大きく変わりうる。彼はこのことを自らの教育実践によって証明し、積極的に社会に発信し続けた。奥地氏の活動も社会の通念により虐げられた子どもに学習の場を提供するとともに、そのことにより社会通念の誤りを正してきたのである。

奥地氏の不登校児へのまなざしは暖かい。偏見に対する氏の果敢なる挑戦は、守るべきものへの優しさから発し、年来の教育実践に裏付けられた強さともなっている。氏の長年の努力と功績に対し、第22回ペスタロッチャー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。